

# 部活動の地域移行に伴う県内の 実態及び今後の方向性

令和5年9月25日(月)倉敷会場

27日(水)津山会場

29日(金)岡山会場

一般財団法人岡山県剣道連盟普及委員会専門部会長

延 原 良 明

私が教員になろうと思ったのは、中学・高校時代に剣道を教えてくれる顧問に出会えなかった悔しさが最大の要因です。

大学を卒業して意気揚々と教職に就き、初任の中学校で6年にわたって剣道部の指導をしました。部員たちは力をつけてくれて中国大会にも出場できるレベルにまでなりましたが、突然の転勤で私の後任には剣道が教えられる人は来ず、部員たちのはしごを外すようになかたちになりました。その時に初めて、世界では珍しい部活動というスポーツシステムが、あまりにも無責任でむごいシステムであることにあぜんとした次第です。

その後、4年間の県教委勤務を経て高校へ転勤しましたが、ここでまた日本のスポーツシステムの不合理さを痛感することになりました。今度は、教えたくても教える

岡山県高体連会長 延原 良明

## 一 日 一 題

### 日本のスポーツシステム

相手がいませんでした。

昨年3月、スポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を出しましたが、教員の働き方改革ばかりが注目されたのは大変残念でした。あのガイドラインは、子どもたちのニーズに応えられるスポーツ環境の再構築が趣旨です。特に、人口減少が著しい地域に暮らす中学生の運動部活動は存続さえ危うい状況なのです。

やりたい子どもたちがやりたい競技・種目に親しめて、教えたい指導者が教えられるスポーツシステムにならないものでしょうか。これまでの偶然に頼ってきた選手と指導者の出会いを必然にしてあげられないものでしょうか。高体連だけではなく、スポーツ少年団の役員も務める私の大きな宿題です。

# なぜ今、地域移行なのか(国の理屈)

※令和4年12月にスポーツ庁と文化庁から発出された  
「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」から

## 前文

学校部活動は・・・教師の献身的な支えにより、我が国のスポーツ・文化芸術振興を担ってきた。

また、・・・教育的意義を有してきた。

しかし、少子化が進展する中、学校部活動を従前と同様の体制で運営することは難しくなっており、学校や地域によっては存続が厳しい状況にある。

また、専門性や意思に関わらず教師が顧問を務めるこれまでの指導体制を継続することは、学校の働き方改革が進む中、より一層厳しくなる。

# そもそも部活動には欠陥がなかったのか？

## 経験を通じて実感した欠陥

- ◇ 顧問の異動による栄枯盛衰

何と無責任でむごいシステムでしょう

- ◇ 専門性のない教員の指導

部員も不幸ですが、教員はもっと不幸かも . . .

- ◇ 高卒までに2回も引退させられる

- ◇ 種目の限定    ◇ 下校時刻の制限    ◇ . . . . etc

よくも欠陥だらけなのにやり続けたものです！！！！

働き過ぎも実感しています。11年間県庁勤務を経験しましたが、そのおかげで家族との時間や趣味の時間が持てたのは事実です。

# 地域移行の目的の「一丁目一番地」は

少子化により存続が難しい部活動が消えていく前に、中学生や高校生が地域においてスポーツ・文化活動に親しむことができる環境を構築し直すということ。

※部活動どころか学校自体が消えていっています。

## 1丁目二番地は

教員の働き過ぎの大きな要因である部活動を学校から切り離そうということ。

改革の第一義が教員の働き過ぎ是正であるかのような印象になったのは、教員の働き過ぎが大きな社会問題化した時期と一致したために報道が偏ったからではないかと考えています。

# 国や学者の将来イメージは？

部活動を学校単位から地域単位の取り組みにし、学校以外が担うことも積極的に進めるべきである。

2019.1 中央教育審議会

「部活動を学校単位から地域単位の取組みとし、学校以外の主体が担うことについて検討を行い、早期に実現すること。」

2019.12 衆参両院の審議での付帯決議

「現在行われている運動部活動は、地域移行が完了するまでの間に過渡的に設置・運営されるものと認識されるべきである。」

2022.6 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言

**要するに、部活動はなくしていくと読めるのです！**

2023年4月から全国で始まった中学校**等**の休日部活動の地域移行は、あくまでも段階的移行の最初であって、最終的には平日も含めて地域が中学生**等**のスポーツ・文化活動を担うというのが国のイメージ。

## 「等」の意味

2022.12 「学校部活動及び新たな地域クラブ活動に関する総合的なガイドライン」

この改革は公立中学校を主な対象としている。

国立中学校は実情に応じて積極的に取り組むことが望ましい。

国公立高等学校では、実情に応じて改革に取り組むことが望ましい。

私立学校では、実情に応じて適切な指導体制の構築が望ましい。

# 高等学校では部活動の地域移行は進まないのか？

中学校での改革が進展し、休日の活動を教員が見なくなったら？



中等教育学校、中高併設校では何が起こる？



同じ学校の教員で休日に部活動に関わる教員とそうでない教員が混在し、不公平感が生じるのは火を見るより明らか。



公立中学校と公立高等学校間での不公平感も増す



果たして私立学校の教員が黙っているのか？

人口の少ない地域の公立高校では、中学校と同じように部活動が維持できなくなっています。いずれ公立高等学校も対象すると言い出す可能性が高いとみるのが妥当じゃないでしょうか。(あくまでも私見ですが…)

# 日本スポーツ協会(JSPO)はどのようにするのか？

2022.3 スポーツ庁「第3期スポーツ基本計画」

ジュニア・ユース世代のスポーツ環境改革に向けたJSPOの役割を明記

- ① **スポーツ少年団への中学生等の受け入れ拡大、スポーツ少年団を新たなジュニア・ユーススポーツ統括組織として体制強化する。**
- ② **総合型地域スポーツクラブとスポーツ少年団が連携・協働する新たな地域スポーツクラブの枠組みを想定している。**

日本スポーツ少年団は、名称を変えたうえで、日本におけるジュニア・ユース世代(幼時から高校生まで)のスポーツを統括する団体に生まれ変わるという目標を立てました。

具体の施策はこれからです。

## 中央競技団体(NF)はどうか？

2023. 1調査では、中央競技団体のうち、半数以上が「今後、何らかの取り組みを行う予定」と回答

具体の動きを始めた中央競技団体は少ない。よって、県内競技団体の動きも遅い。

## 都道府県レベルではどうか？

2023年度から、この改革の主管課が教育庁保健体育課から知事部局スポーツ振興課に移った。



学校部活動の改革というレベルからジュニア・ユース世代、とりわけ中高校生世代のスポーツ環境の大改革だという認識に変わった。学校の改革レベルから地域のスポーツ環境改革へのレベルアップがなされた。

## 市町村レベルではどうか？

人口規模により取り組みは様々だが、人口の少ない市町村の取り組みは加速しつつある。人口規模の大きい市での取り組みは遅いのか。

剣道連盟として、「**他人事ではなく自分事**」であるという意識を持つこと。そして、「**他力本願ではなく自力**」で取り組む意識を持つことが大切だと思います。待っている、ますます剣道人口が減少するでしょう。手遅れにならないうちに！

# 全国中学校体育大会で何が起こっているか？

2023年の全国中学校体育大会から、競技ごとに条件は違うものの、部活動以外の団体からも出場できるようになった。

## 2023全国中学校体育大会(8月開催分)16競技の参加状況

※延原調べ

水泳	男子100m自	4/48人	女子100m自	8/48人
陸上競技	男子100m	3/115人	女子100m	7/76人
サッカー	中学校以外は出場なしだが、合同中学校チームが1			
バスケットボール	中学校以外出場なし			
ハンドボール	男子	2/23チーム	女子	2/23チーム
バドミントン	男子団体	3/24チーム	女子団体	2/24チーム
軟式野球	中学校以外の出場なし、合同中学校チームが2/25チーム			
バレーボール	男子	3/27チーム	女子	1/36チーム
体操競技	男子個人	3/99人	女子個人	9/99人
新体操	個人総合	13/47人		

柔道 男子団体 2/48チーム 女子団体 5/48チーム  
剣道 団体は出場なし、男子個人1/48人 女子個人 1/48人  
相撲 団体 11/48チーム  
ソフトテニス 男子団体 5/25チーム 女子団体 4/25チーム  
ソフトボール 男子 4/16チーム 女子 4/28チーム 合同チームは男子2,女子3  
卓球 男子団体 1/39チーム 男子個人 6/114人  
女子団体 0/39チーム 女子個人 2/114人

中学校以外がエントリーできるようになった初年度としては、多いという印象です。

今後、参加条件のすり合わせが必要になってくるでしょうが、この流れは勢いを増すでしょう。

いずれ「～道場」、「～スポ少」という名前で中体連の大会に出場することが当たり前になってくるかもです。

# 2023年度の全中剣道大会要項の参加資格から要約

## 地域スポーツ団体等(地域クラブ活動)に所属する中学生の場合

- ◇ 県中体連またはブロック中体連の予選会に**参加を認められた生徒**であること。
- ◇ 中体連の目的及び活動を理解し、それを尊重すること。
- ◇ 中学校に在籍している生徒であること。
- ◇ **日常継続的に指導資格を有する指導者の指導のもとに、活動が適切に行われていること。**
- ◇ スポーツ庁の**ガイドラインを遵守**していること。
- ◇ **剣道連盟に登録**していること。かつ同じ内容で県中体連に登録していること
- ◇ 全予選会において、**競技役員や審判などで協力**すること。
- ◇ **地域団体から出場する場合、在籍中学校での大会参加はできない。その逆も同様である。**

## 各支部剣道連盟はどうすべきか

まずは剣道関係者が、いま起こっていること、起ころうとしていることを正しく理解することが一番でしょう。

その上で、自分たちの地域でどう動くべきか議論してください。地域ごとに状況が違い過ぎるので、一括の指示が出ると思って待つのは得策じゃないでしょう。

情報は待っていても届いてこない



情報は自分で取りにいけばいくらでも手に入る時代です。  
キーワードは「**待たない!**」で「**攻める!**」でしょうか。

## 剣道部が廃部に追い込まれるのは何故ですか？

それは、部員が少ない状態が続くからです。地域に剣道をする子どもが多ければ、剣道専門の顧問はいなくても剣道部は存続するのです。

中高から剣道部が消えていくのは、学校側の責任ではなく、地域の責任です。地域から剣道の火を消さないためにどう動くかを真剣に議論し、具体的に動くことが必要です。

### 大事な視点として ※あくまでも私見ですが…

- ◇ 中高に剣道部がない地域においては、入学という機会に剣道に出会える仕組みづくりを
- ◇ 中高に剣道部があって専門指導のできる顧問がいる場合は、その顧問が転動していなくなることを前提とした持続可能な指導体制づくりを
- ◇ 剣道部がない学校や剣道部がある学校に専門指導のできる教師が赴任しても、地域が指導する体制の維持を



**剣道関係者にとって、この大改革は**

**「他人事じゃなく自分事」**

**「他力本願から自力・自立へ」**

岡山県スポーツ少年団と岡山県剣道連盟は、10月21日の全国スポーツ少年団剣道交流大会岡山県予選会において、中学生が部活動以外でも試合に出られる機会を増やすために、オープン種目として中学生団体の部を設けました。  
僅かな一歩ですが、一歩踏み出します。